

日本トランスパーソナル心理学／精神医学会 第15回学術大会 —トランスパーソナル心理学の潮流と仏教—

大会長挨拶

合田秀行（日本大学）

今回は、「トランスパーソナル心理学の潮流と仏教」をテーマとして、第15回学術大会を行うこととなりました。私自身が仏教研究の立場から、トランスパーソナル心理学に関わってきた経緯もあり、このテーマとし、仏教の研究と実践に深く関わってこられたお二人の先生をお招きして、特別講演を企画しました。さらに、午前中の研究発表に加え、前年度に引き続き、限られた時間ながらも、二部構成で各分科会を設けました。また、大会の前日には新理事による理事会が開かれ、新たな役員が総会で報告される予定です。寒い時期の変則的な開催となりますが、多くの皆様の参加をお待ちしております。

○申し込み方法

大会参加を希望される方は、下記まで、所属、氏名、会員資格の有無、懇親会参加の有無を記載のうえ、メールあるいはFAXにて申し込んでください。学生の方は、所属のところに学生と入れてください。あわせて参加費の振込をお願い致します。振込は2月20（金）までをお願い致します。なお、参加費が若干高くなりますが、事前の申し込みがなくても、当日受付でも参加できます。

○申込・問合せ

事務局アドレス：jatp@mail.goo.ne.jp

事務局 FAX：03-5317-9217（FAXの場合、学会専用回線ではないため、必ず「日本トランスパーソナル心理学/精神医学会事務局」宛と明記して下さい）

○大会参加費（2月20日までにお振り込みいただいた場合の費用/当日受付費用）

学術・一般会員	2,000円	（当日2,500円）
学生会員	1,000円	（当日1,500円）
非会員	2,500円	（当日3,000円）
非会員学生	1,500円	（当日2,000円）
懇親会費	一律	4000円

○参加費・懇親会費振込先

口座名：日本トランスパーソナル心理学／精神医学会

郵便振替口座：00100-2-362396

銀行振込口座：三井住友銀行・下高井戸支店（店番255）（普）3855447

会員の皆様には、すでに学会参加費・懇親会費専用の振込用紙をお送りしてあります。

プログラム

日時：2015年2月28日（土）8:45-18:00

場所：日本大学文理学部 図書館3階 オーバルホール（巻末のキャンパスマップをご参照ください）

※理事会（大会前日）：2月27日（金）17:00～ 会場 2号館12階 哲学科会議室

午前の部

8:45～ 受付開始（図書館3階オーバルホール入口）

9:10～ 9:15 開会挨拶 合田秀行（大会長）

9:15～12:00 個人研究発表

座長：石川勇一先生

- 1) 臨死体験後に辿る過程 —臨死体験者と日常への復帰—
岩崎美香（明治大学大学院情報コミュニケーション研究科）
- 2) 自他共栄と「和の太極拳」—楊名時の思想—
蒲生諒太（京都大学大学院教育学研究科）
- 3) セルフ・コンパッションとスピリチュアリティが、人生満足度に及ぼす影響
村上祐介（鳴門教育大学予防教育科学センター）

（休憩 10:45～11:00）

座長：村川治彦先生

- 4) 意識進化 —新しい思考様式がもたらす革新的な価値の創造について—
佐藤数行（大阪大学大学院工学研究科）
- 5) 加藤清とトランスパーソナル精神医学
塚崎直樹（つかさき医院）

（昼食 12:00-13:00）

【昼食について】学内食堂（カフェテリア秋桜（コスモス）場所：3号館1階/カフェテリア・チェリー 場所：第2体育館1階）他をご利用ください。春休み期間中ですので、学内食堂もそれほど混雑しないと思います。もしくは日大通り・下高井戸商店街にも多くのお店があります。受付に商店街マップをご用意しますので、必要な際には受付にお申し出ください。

午後の部

講演司会:合田秀行

13:00~14:10 特別講演 第1部

仏教における心の理解と瞑想

—近著『仏教と現代物理学—休の【般若心経】を読む—』に依りながら—

講師 可藤豊文先生 (哲学者)

(休憩 14:10~14:20)

14:20~15:30 特別講演 第2部

坐禅の解明:人を成熟させる触媒として

講師 藤田一照先生 (曹洞宗国際センター所長)

(休憩・会場移動→2号館 15:30~15:45)

15:45~16:30 分科会① (会場:2号館2階)

○禅と心理療法を巡る懇談会:塚崎直樹先生 (2201 教室)

○死とともに生きる:永澤哲・村川治彦先生 (2202 教室)

○紛争解決とスピリチュアリティ:松本孚先生 (2204 教室)

(休憩・会場移動 16:30~16:35)

16:35~17:20 分科会② (会場:2号館2階)

○霊性に導かれる援助法の探求:石川勇一先生 (2201 教室)

○可能性としての「マインドフルネス」:小室弘毅先生 (2202 教室)

○スピリチュアル・エマージェンシー・クンダリーニ体験:巻口勇一郎先生 (2204 教室)

(休憩・会場移動→オーバルホール 17:20~17:25)

17:25~17:55 総会

17:55~18:00 閉会の辞 (新会長)

18:10~20:00 懇親会 (会場:学内カフェテリアチェリー) (予定)

懇親会費は一律4,000円とし、当日も受け付けますが、なるべく事前申し込みにご協力ください。

研究発表 9:15～12:00
臨死体験後に辿る過程
—臨死体験者と日常への復帰—

岩崎美香¹⁾

1) 明治大学大学院情報コミュニケーション研究科

キーワード：臨死体験・後遺作用・日常への復帰・往還の旅

【目的】

臨死体験 (near-death experience) は、死への恐れが減少する、新しい世界観や価値観へ開かれるといったポジティブな変化をもたらすことが多い。しかし、一方で、臨死体験という特異な体験のインパクトや臨死体験後の変化の受けとめをめぐって、日常生活への復帰後に、社会生活の中で混乱や葛藤が生じることもある。

自らが臨死体験者であり、臨死体験の研究者であるアトウォーターは、臨死体験による心理的・身体的な後遺作用 (aftereffects) によって、日常生活に困難を抱える臨死体験者は少なくないことを指摘し、後遺作用が落ち着くのに数年要すると述べる [Atwater 1994=[1995]1997]。また、グロフは、臨死体験は全く準備のない人々に、突然、深いシフトを引き起こすことから、臨死体験後にスピリチュアル・エマージェンシーが起こりやすいことに言及している [Grof, S & Grof, C 1990=1997]。このように、臨死体験後にしばしば困難が伴うことが指摘されているが、臨死体験によって拡大した自己意識、感覚、世界観を日常の中でどのように調和させていくのかという点が注目される

筆者はこれまでインタビュー調査から日本人の臨死体験の全体像を検討し、臨死体験を日常の外側の世界と日常世界を往還する旅と位置

付けてきた [拙稿 2011]。往還の旅としての重要な部分を担うのは、日常の外側の世界での体験をどのように日常の中に持ち込むかが示される、臨死体験後の【日常への復帰】であると考えられる。臨死体験後に辿る【日常への復帰】の過程に焦点を絞り、その後の追加事例のデータも加えて、再度検討していく。

【対象と方法】

2008年から2014年末までに、日本人の臨死体験者を対象に19事例のインタビュー調査を行ってきた。臨死体験後に辿る過程に焦点を置く研究の目的から、「過程」を捉えることに適した質的研究法である修正版グランデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) を採用して、データを分析した。具体的には、日本人の臨死体験者のインタビューの臨死体験後についての語りをコーディングし、重要な概念を抽出。概念をさらに上位のカテゴリーごとにまとめ、概念やカテゴリー同士のつながりを検討し、【日常への復帰】の過程の全体像を捉えた。

【結果】

臨死体験後に辿る【日常への復帰】の過程は以下のようなことが明らかになった。

まず、臨死体験後の直後、臨死体験中に起きた出来事の残り続ける鮮明な感覚に基づいて、普通でない体験をしたと考えるなど＜体験のインパクトの受けとめ＞が生じる。しかし、臨死体験のことを周囲の人に語ると驚かれたり困

惑されたり、または自分のこれまでの価値観と照らし合わせると体験内容を不可解で受け入れられないと感じたりと、＜体験の位置づけへの攪乱＞が生じる。そして、同じような体験をした人との＜体験の共有化＞を経ることもあるが、自分が体験したことへのゆるがない確信を持ち、体験への肯定感へと転換したり、体験への意味の付与が生じるといった＜体験の再位置づけ＞が起こる。＜体験の再位置づけ＞に至る流れも見られる。＜体験の再位置づけ＞は、＜迷いや葛藤への揺れ戻り＞が生じたりと、必ずしも肯定的な状態だけにはとどまっていなことも付け加えておく。

臨死体験後の変化として、＜死後イメージの明確化＞と＜新しい価値観への開かれ＞のほかもう一つ重要なものとして＜身体や感覚の変容＞がある。＜身体や感覚の変容＞とは、目に見えない世界を敏感に捉えるような超常的感覚が高まるといったことが主に挙げられる。こうした感覚が生じた時、社会生活上の混乱や齟齬が生じることがある。同じような体験をした人や理解者と出会うなどする＜体験の共有化＞を経るなどして、感覚をコントロールすることを体得したり、時間の推移に伴って鋭敏な感覚が緩和されるといった＜混乱の沈静化＞へと収束をみる。

【日常への復帰】の最終的な局面では、＜社会への還元＞が見られる。それは臨死体験の結果得たことを日常生活の中で周囲や社会に文字通り還元していくことを示すが、具体的には「臨死体験のインパクトの伝達」、「霊的ケア役割の引き受け」、「職業上のモチベーションへの反映」である。＜社会への還元＞は、＜死後イメージの明確化＞や＜新しい世界観・価値観への開かれ＞といった臨死体験によるポジティブな変化から直接的にインスパイアされて行われる一方、混乱や葛藤を経た末になされる経路が見られる。＜社会への還元＞は、日常と日常の外側の世界を還流させる役割を果たす。

【考察】

臨死体験後に辿る過程では、臨死体験のインパクトによって起きた自己意識や世界観の拡大のポジティブな側面と、日常生活の中で混乱や葛藤を抱えて揺れ惑うといった側面の両方が絡み合う様相が見出される。この絡み合いの中で＜体験の再位置づけ＞が果たす役割が注目される。混乱や葛藤は＜体験の共有化＞を経て＜体験の再位置づけ＞へと向かう。また＜死後イメージの明確化＞や＜新しい世界観・価値観への開かれ＞といったポジティブな変化と連動しながら、＜体験の再位置づけ＞は更新され、＜社会への還元＞への道筋にも影響を与えている。今回の分析では、＜体験の再位置づけ＞がさまざまな方向から行われる中で、臨死体験後の日常が再編成されるあり方が見えてきた。

【結語】

臨死体験後に臨死体験者が辿る過程は、トランスパーソナルな領域に触れて拡大した自己意識や感覚や世界観を日常の中でどのように扱っていくかという問題一般にも通じる。データの集積を重ねながら、その過程をより精緻に捉えていきたい。

【引用文献】

- ・Atwater, P. M. H. (1994). *Beyond the Light: The mysteries and revelation of near-death experience*. New York: Avon. (アトウォーター, P. M. H. (著) 角川春樹 (訳) (1995). 『光の彼方へ』角川春樹事務所 ((1997) ハルキ文庫))
- ・Grof, C. & Grof, S. (1990). *The stormy search for the self: A guide to personal growth through transformational crisis*. California: Jeremy P. Tarcher. (グロフ, C. & グロフ, S. (著) 安藤治 吉田豊 (訳) (1997) 『魂の危機を越えて —自己発見と癒しの道』春秋社)
- ・拙稿 (2011). 「旅としての臨死体験—日本人臨死体験者の調査事例より—」情報コミュニケーション研究、2、35-52.

自他共栄と「和の太極拳」 —楊名時の思想—

蒲生 諒太¹⁾

1) 京都大学大学院教育学研究科

キーワード：太極拳・気功・禅・新靈性運動・癒す知

【問題と目的】

楊名時(1924-2005)は戦後日本において太極拳の普及に尽力した人物である。中国に生まれた楊は、戦中日本に渡り、戦後、中国語教師として生計を営みながら、中年期以降、自身の設立した団体をもとに健康法としての太極拳を普及していった。

楊は日本の太極拳普及を支え、「武術太極拳」に対する「健康太極拳」の体系を確立するなど、スポーツ史・養生史上、大きな貢献をなした人物である。また、戦後日本において気功を健康法として紹介し、「新靈性運動」(島藪, 2007)の担い手とされる津村喬に多大な影響を与えるなど、日本の精神文化やトランスパーソナル研究にも大きな影響を与えた人物である。

しかしながら、これまで楊名時の人生や思想について研究されることはほとんどなかった。日本の太極拳普及をまとめた当時の一次資料をもとに検討した李(2009)の研究でも楊とその団体についてはフォローしきれていない。

「新靈性運動」の前駆的な運動、ないしは「癒す知」の系譜(島藪, 2003)として楊の太極拳を位置づけることを念頭に、本研究ではまず、楊が残したテキストを整理し、彼の書物に示された太極拳をめぐる思想を整理する。

【楊名時の太極拳(1) —「無」と「動く禅」】

楊は太極拳のことを「動く禅」と呼んでいた。楊は太極拳の稽古方法に「立禅」という瞑想方

法を取り入れるなど、積極的に禅の要素を取り入れていた。背景には中国における幼少期の仏教体験や留学後の参禅体験が存在する。

太極拳に禅を接続することにより、楊は太極拳で目指すべき方向として「無」と定めた。しかし、それは一般的に理解される「無」—「自己超越」を意味するというよりも、心の中の煩わしいことを取り払い「無心」になるという意味合いで用いられているにすぎなかった。

【楊名時の太極拳(2) —「和の太極拳」】

このような楊の「無」という概念は「和」という概念に置き換えられ、楊において太極拳は「和」を目指すものとなる。

楊のいう「和」は「調和」、「平和」などと響きあう概念である。太極拳によって煩わしいことが心からなくなることなどで心身の調和が得られ、他者との関係の中で「我」を通すことがなくなり人間関係も平和になるというのである。このことを楊は嘉納治五郎の「自他共栄」の概念を引き合いに語っている。

このような「和」を目指す太極拳として楊は「和の太極拳」という基本理念を押し出して普及活動に取り組んでいった。それは武術太極拳のような競技・競争ではない、「健康太極拳」というもう1つの太極拳の可能性を探るものであった。

【楊名時の太極拳（3）—「宇宙の政治家」】

このような「和」、「自他共栄」の理念は楊の太極拳普及活動において何をイメージして語られていたのか。1つは楊自身が率いていた組織における「和」である。楊はその普及活動において二度、大きな組織的決裂を経験している。2つ目に組織外の人々との「和」である。決裂した太極拳の指導者や組織、つまり、太極拳の普及を目指す同じ志を持ちながらも異なる方法、考えを持った「他者」との「和」、「自他共栄」がここに見いだせる。

しかし、これらの出来事は活動をしている中で起きたことであり、楊が普及初期より「和」の重要性を説いていたことと齟齬が生じる。楊の人生において「和」、「自他共栄」という理念が重要となった背景には「日中友好」という問題がある。

戦中、日本の傀儡政権によって留学生として送り出され、戦後、中国の政変によって帰国を諦めることになった楊において、異なる国家、国民、文化の「和」、「自他共栄」は人生における1つの主題であった。楊は自身を「宇宙の政治家」と自称したが、政治家を特定の集団の利害を代表するものとするなら、この表現はそもそも奇異であろう。この言葉には楊の視点が「宇宙」という広く自由な視点で全体の調和を目指そうとしていたことの表れである。

【考察】

「無」という概念と「煩わしいことを心からなくす」心的な動き、そして、「心身の調和」という効用。これらを結びつける発想はめずらしいものではなく、一般的な気功教科書（馬，1990）にも見られるものである。この「無」—「自己超越」の発想の欠如は世俗化された心身技法において一般的なものである。

楊の太極拳普及がカルチャーセンターブームに後押しされ展開されたこと、その中でもとくに稽古体系の簡便さなどが重宝された背景を考えれば、精神的な語りを全面に出しにくい

という背景はあるだろう（共産党政権のもと公認・整理された現在の「制定拳」よりも楊の語りは精神性を重視している）。

しかしながら、楊が禅に接近しつつもその思想史の中核と言っても過言ではない「自己超越」の問題を回避し、「和」へと至り「自他共栄」を目指したのは、一般大衆に受け入れられるため、というわけでもないだろう。むしろ、「和」や「自他共栄」を重視したことは楊自身の人生と密接に関係するものである。「自己超越」の喪失、ないしは「和」や「自他共栄」の強調は激動の戦中戦後の時代を生きた楊において太極拳が自身の心身の健康術であったということに帰着する。つまり、楊にとって太極拳は幼少期に習得した1つの心身技法であり、波乱に満ちた人生を生き抜くために心身のバランスを整える常備薬のようなものだったのである。

このような経験をもとに自身の太極拳を1つの思想としてまとめた「和の太極拳」という考えには集団の和や世界の和が崩れる場面に立ち会ってきた楊自身の経験が色濃く反映されているのである。

【引用・参考文献】

- 李自力（2009）『日中太極拳交流史（スポーツ学選書）』叢文社
- 馬濟人（1990）『中国気功学』浅川要監訳，東洋学術出版社（馬濟人編著『中国気功学』陝西科学技術出版社を底本に翻訳）
- 島菌進（2003）『〈癒す〉知の系譜—科学と宗教のはざま』
- 島菌進（2007）『精神世界のゆくえ—宗教・近代・霊性』
- 楊名時（2001）『太極—この道を行く』海竜社
- 楊名時著・中野完二編（2004）『〈太極〉巻頭文集』日本健康太極拳協会

セルフ・コンパッションとスピリチュアリティが、 人生満足度に及ぼす影響

村上 祐介¹⁾

1) 鳴門教育大学予防教育科学センター

キーワード：自己超越傾向，コンパッション，マインドフルネス

【目的】

精神的健康の指標の一つとして、人生全般に対する肯定的評価の程度である人生満足度がある。例えば、幸せへのアプローチの仕方に着目した研究では、意味志向性や没頭志向性が、人生満足度を予測することが明らかになっている(熊野, 2011)。

近年では、この人生満足度と関連をもつ様々な要因が調べられているが、その指標の一つとして、セルフ・コンパッション (self-compassion: SC) が挙げられる。SCは、「自分へのやさしさ (self-kindness)」、 「マインドフルネス (mindfulness)」、 「共通の人間性 (common humanity)」 という三つの下位概念から構成され、人生満足度と正の相関関係があることが明らかになっている (Neff, 2003)。

本研究では、SCが人生満足度に及ぼす影響を検討していくが、同時に、精神的健康に正の影響を及ぼす (中村, 2007)、スピリチュアリティ (自己超越傾向) との関連性にも着目したい。なぜならSCは、自分に対する慈しみという自己志向的な概念でありながら、マインドフルネスや共通の人間性に見られるように、自己 (自我) 中心的な認知や意識とは異なり、利他性、社会・人類ひいては神仏などの超越的存在に見られる、異なる位相への意識の拡張を伴っている場合が予測されるからである。例えば、共通の人間性は、それ単一のみならず、超越的な次元に対する信念や体験の高さと相互に関連しな

がら、人生満足度へと影響を及ぼしている可能性がある。そこで本研究では、SCとスピリチュアリティの下位概念間の関連性に着目しつつ、これらの変数が人生満足度に及ぼす影響を検討する。

【対象と方法】

対象者 欠損値が確認された調査協力者を除外し、大学生45名を分析対象とした (男性26名、女性19名；平均年齢18.58歳， $SD = 0.92$)。調査方法 心理学関連の講義内で、授業の一環として調査を実施した。調査用紙への回答は自由であること、プライバシーの保護等について事前に説明し、教育・研究使用の許可が得られた者を分析の対象とした。

質問紙の構成 (1) 人生に対する満足尺度 (SWLS; Diener et al., 1985 角野訳, 1995) : 人生満足の認知-判断的側面に関する5項目, 7件法; (2) セルフ・コンパッション尺度日本語版 (SCS-J; 有光, 2014) : 自分へのやさしさ (5項目), 自己批判 (5項目), 共通の人間性 (4項目), 孤独感 (4項目), マインドフルネス (4項目), 過剰同一化 (4項目) の6下位尺度計26項目, 5件法; (3) スピリチュアリティ傾向尺度 (STS-2; 中村, 1998) : 18項目, 5件法。

【結果】

各尺度に含まれる項目の素点を合計し、尺度得点を算出した。なお、STS-2については、下位尺度の解釈可能性を高めつつ情報量を担保するために、村上（2013）の因子分析結果に基づき、「実存性」、「利他性」、「人類愛」、「超越性」の4下位尺度を作成した。

次に、中心化した各下位尺度、およびその積によって作成した交互作用項を独立変数に、人生満足度を従属変数とした重回帰分析を行った。以下、上位の交互作用項が有意であった予測式のみ報告を行う。

まず、実存性、超越性、マインドフルネスを独立変数とする重回帰式が有意であり($F(7, 37)=4.31, p = .001, R^2 = .345$)、三つの予測変数の交互作用効果が有意であった($B = -.39, t = -2.05, p = .048$)。そこで、超越性およびマインドフルネスそれぞれの平均値 $\pm 1SD$ の組み合わせにおける、実存性の効果について、単純斜行分析 (simple slope analysis) を行った。その結果、超越性が高くマインドフルネスが低い参加者において、実存性の効果が有意であった($t = 3.46, p = .001$)。また、超越性が高くマインドフルネスが高い参加者と、超越性が低くマインドフルネスが高い参加者においては、実存性の効果は有意傾向であった($t = 1.73, p = .091; t = 1.85, p = .073$)。

次に、実存性、人類愛、孤独感を独立変数とする重回帰式が有意であった($F(7, 37)=3.959, p = .003, R^2 = .320$)。また、三つの予測変数の交互作用効果が有意であったので($B = .362, t = 2.244, p = .031$)、人類愛および孤独感それぞれの平均値 $\pm 1SD$ の組み合わせにおける実存性の効果について、単純斜行分析を行った。人類愛が低く孤独感が低い参加者および、人類愛が高く孤独感が高い参加者において、実存性の効果が有意であった($t = 2.29, p = .028; t = 2.95, p = .006$)。

最後に、超越性、人類愛、自分へのやさしさを独立変数とする重回帰式が有意であり($F(7,$

$37)=3.209, p = .009, R^2 = .260$)、人類愛と自分へのやさしさの交互作用効果が有意であった($B = -.366, t = -2.054, p = .047$)。そこで、自分へのやさしさの平均値 $\pm 1SD$ の組み合わせにおける、人類愛の効果について単純斜行分析を行った。その結果、自分へのやさしさが低い参加者において、人類愛の効果が有意であった($t = 3.46, p = .001$)。

【考察】

本研究の結果より、(1)感情と適度な距離をとることはできないが、生かされている感じや超越的信念をもっている者、(2)世界から切り離された感じはないが、意識が地球規模に拡張していない者や、世界から切り離された感じをもっているものの、人類全体のために何かしたいと感じている者では、日々の充実感や意味を感じるほど、人生満足度が高まることが明らかになった。また、(3)自分を思いやることができなくても、人類とのつながりを感じている者は人生満足度が高いことが明らかになった。

こうした結果は、意味志向的な心性や自己超越傾向が、精神的健康に影響を及ぼすという先行研究(熊野, 2011; 中村, 2007)の知見を一部支持すると同時に、こうしたメカニズムにおいて、SCの低さという要因が関与していることを示唆するものである。

【結語】

本研究より、SCが低い場合でも、社会・人類・神仏といった次元へと拡張した意識が涵養されていれば、人生に対する肯定的な認知が行なわれる可能性が示された。

【主な引用文献】

熊野道子 (2011). 日本人における幸せへの3志向性—快楽・意味・没頭志向性— 心理学研究, 81(6), 619-624.

意識進化

—新しい思考様式がもたらす革新的な価値の創造について—

佐藤 数行¹⁾

1) 大阪大学大学院工学研究科

キーワード：意識・新しい思考様式・価値の創造・男性性と女性性・量子化

【目的】

環境破壊や人間社会の歪から、我々は地球的規模の危機に直面しているが、人間の二元性の思考様式では、これら起こった「結果」に対する対処法のみで、根本的な解決策を見出すには至っていない。歴史的にみても、このような対処法を用いることで、表面的には様々な分野で社会が進化したように見えるが、実際には「人間の内面」が置き去りにされたことで、社会の歪を増長してきたと考えられる。このことは、実は二元性に基づく人間の思考様式の限界を示唆している。

これについて、かつて哲学者カント（1787年）は『純粋理性批判』の中で、二極化した「主体と客体」に関する「コペルニクス的転回」といわれる「思考様式の変換」を提唱したものの、思考様式を変換するための具体的な実践方法を見出すには至らなかった。また、その後フッサール（1907年）など、現象学的に「主体と客体の一致」に関する指針を打ち出したが、完全な理論化には成功しなかった。

このことから地球社会のパラダイムシフトには、今までの人間の思考様式に基づく「主体と客体」の「二元性の視点」から、「全く新しい視点」を獲得する思考様式が必要とされている。

近年、文部科学省（COI（センターオブイノベーション））も「新しい思考方法が導く革新的な価値創造（ビジョン2）」として、新し

い社会ビジョンを基にした10年後の社会常識の新たな創出を図っている。

<http://www.jst.go.jp/coi/koubo/koubo.html>

新しい思考様式の獲得について従来、多くの先人たちが主観的経験に基づいた「実在性」について論じている。例えば、ウィリアム・ジェームズ（William James: 1890年 Chapter X）に始まり、その後アルフレッド・ホワイトヘッド（Alfred N. Whitehead: 1929年）は、究極の実在はある種のモノではなく、一連の生起（occasion=actual entity）、すなわち「プロセス:process」として捉えた。これは形而上学での実在性の構図を現代科学の領域において可視化させようとする試みであった。しかしながら、主観的経験に基づいた実在性については未だ明らかにされていない。

さらに、デイビッド・チャーマーズ（David J. Chalmers: 1995, 1997年）は、内面的な心的体験（クオリアと呼ばれるもの）をひとつの実体（entity）として導入し、その振る舞いを記述する法則性から実在性を含む「意識の問題」を解決すべきとし、情報の二相理論

（double-aspect theory of information）を提案している。そして彼は“現在の物理学”の範囲内の現象として意識の問題を説明してしまうとする還元主義的な方法では意識に関するすべての物事を解くことができないので、現代物理学は拡張されるべきと提案している。その結果、これら意識の本質の研究課題は、「意

識のハードプロブレム」と名付けられ、現代物理学も拡張した全く新しい理論展開が求められている、としている。

しかしながら、「意識のハードプロブレム」の研究はこれまで彼自身も指摘するように、「現象判断のパラドックス」という、「意識について語る自分の行為そのものも意識と無関係に行われている」という二元論にとって最大の課題を有しており、未だその解決には至っていない。別の見方をすれば、量子物理学の分野ではエルヴィン・シュレディンガー (Erwin Schrödinger: 1958年) は物質世界の探究の結果、重力場と電磁場を統一する統一理論のゆきつく所は、人間の「自我」と「(その人間が見ている)世界」との合一、すなわちそれは「主体」と「客体」の合一を意味しており、その達成が「意識の働きの解明」や主観的経験に基づいた「自我の問題」や「生命の理」の解明に繋がると論じている。しかし、彼はミクロの領域での粒子の振る舞いを解明したものの、マクロ領域での量子化や自我の問題等を解決するには至っていない。

諸科学の中で最も科学になりにくいと思われる「意識の科学」について近年、精神現象の量子論的立場の観点からその科学的・論理的探究方法が分析され、また量子物理学の再構築(拡張)も含め、そこで明らかとなった課題の整理がなされている。その中で最も大きな課題のひとつに「“思考している自分自身をも対象にしなければならない”というパラドックスを超越した客観性を如何にして確保するのか」というものがある。

そこで本発表では、神学者ROSSCO氏が示す「同化・反転のシステム®」を引用し、これまでの意識の研究の限界点であった「現象判断のパラドックス」を解き明かし、「意識のハードプロブレム」の解決を行う。そして意識の実在性を明らかに示すことにより、「意識の俯瞰度」が高まった人々による新しい思考様式がもたらす社会の根源的再生の可能性を示す。

【対象と方法】

今回、従来人間の思考法がもつ視点と、新たに「同化・反転のシステム®」に基づく“新たな思考様式で得られた意識(視点)”との違いを明らかにするために、視点に関するレクチャー前後(以下、図式を使用)での感覚の変化についてアンケート調査を実施した。

【結果】

対象者 317名中のうち10% (31名)を無作為に抽出して集計した。アンケート内容は「同化・反転のシステム®」に基づく“新たな思考様式に関するレクチャー前後での「悩みの有無、感覚の変化(具体的に自由記述)」に関して質問し、テキストマイニングによる統計処理 (Word Miner (日本電子計算株式会社)) を採用した。

【考察】

本研究でのレクチャー前後の感覚の変化について、統計処理した結果、表に示すように無意識で発していた自我のこだわりの言葉が、受講後には「こだわりの言葉が発しない」までに、視点変換による感覚の変化によってそのこだわりの言葉の使用頻度が劇的に低下しており、統計的有意 (<有意確率0.05) となっていた。

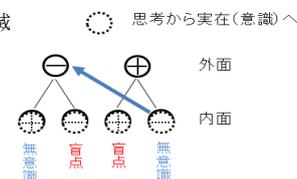
そして、人間関係・子育て・恋愛結婚・生活上での心的状況が

- 第一回：状況の整理、第二回：両極を知る
- 第三回：思考パターンの認識
- 第四回：新しい視点の獲得 で変化した。

表. 自我に基づくこだわりの消滅

	受講前	受講後	検定値	有意確率
1 自分	N.D.	N.D.	4.31	0
2 パートナー	N.D.	N.D.	2.93	0
3 関係	N.D.	N.D.	2.74	0
4 自身	N.D.	N.D.	2.54	0.01
5 幸せ	N.D.	N.D.	2.19	0.01

N.D.: Not Detect (未検出)



【引用文献】

- 図. 人間の思考様式の俯瞰図
- 行正徹 (2010) 「量子論の観測の問題と精神現象との共通性について」『BMFS学会誌』12 No. 1: 37-42.
- Chalmers D.J. (1997) .Moving forward on the problem of consciousness, J. Consciousness Studies, 4 (1), p3-46
- ROSSCO (2014) 『THE ANSWER -反転のトリックから抜け出せ』 三交社

加藤清とトランスパーソナル精神医学

塚崎 直樹¹⁾

1) つかさき医院

キーワード：スピリチャリティ・禅・カトリック・サイケデリックドラッグ

【はじめに】

加藤清は、サイケデリック薬剤を使用した経験を語ったり、「あの世」と「この世」の関係を語ったりして、実証性に依拠しようとする精神医学にとっては、到底理解される存在ではないだろう。しかし、身近に接した者にとっては、語ることが常に新鮮で、アクチュアリティのあふれた存在であった。加藤が語ったことを文章に定着させたとしても、その存在感を含めて再現することはできない。身近に接することのできた立場から、得た手がかりを少しでも後に残しておきたいと考えて、この報告をまとめてみた。

【加藤清の依拠したもの】

加藤の臨床の基礎を作っている要素について触れてみたい。

京都大学精神科では、最初中枢神経の生理学を専攻。その後、薬理学へ発展した。当初は薬物療法への関心も高かった。みずず書房の異常心理学講座で、薬物療法を担当している。薬物療法を実践する中で、サンド薬品から、治療的な有用性への助言を求める意味で提供された LSD が、その後の発展に大きく関わってくる。

加藤は敗戦後の社会の混乱の中で、精神的な支柱としてカトリック信仰に近づいた。貧しい戦後社会に、欧米の医療品や支援物資が教会を通じてもたらされた。支援物資の運搬や配布の作業にも関わった。そこから、生まれたイメージが加藤

の医療を施すという姿勢に影響を与えたと考えられる。また、カトリックの精神科医であることで、教会関係の聖職者（神父、修道女）などが精神病的な問題を抱えたときに、助言者や治療者として関わることになった。このことは、宗教活動の背後の動きというものを体験させることになり、宗教、宗教組織というものへの、多面的な把握をもたらしたと考えられる。

戦後の京都大学精神科は、日本における精神病理学の中心地であった。精神病理、精神療学会が、京大関係者を中心として組織され、一時は精神病理学の牽引車の役割をした。村上仁、藤縄昭、荻野恒一、木村敏、笠原嘉、三好郁夫、などといった人々が輩出した。加藤清はそのまとめ役という位置であった。その後、現存在分析、人間学派と呼ばれることになる一団である。現存在分析は、ビンスワングーやボスの業績に多くを負っている。人間学派の業績の一つは、統合失調症の世界がどのようなものであるかを明らかにすることにあつた。そこから統合失調症への働きかけの手がかりが発見されるだろうという期待が持たれた。

人間学派の中心であった、ビンスワングーの背景となっているのは、言うまでもなく、ハイデッガーである。ビンスワングーやボスの著作には、ハイデッガーの哲学が駆使されていて、ハイデッガーを理解することなくして、人間学派の理解は深まらない。京大の精神科では、ハイデッガーを理解するために、京大の哲学科の指導を仰いで、

10年に渡って、ハイデッガーの講読会が行われた。精神科教室と哲学科との交流も深まった。京大の哲学科は、西田哲学の中心であり、西田哲学から禅への関心も深まった。加藤が個人的に惹かれたのは、久松真一であった。加藤の禅理解には、久松真一の影響が大きい。それだけではなく、加藤の言動の様式に、久松真一が一つのモデルとなっている。

加藤の基礎になっているものを、精神薬理学、精神病理学、カトリック信仰、禅としてとらえることができる。

【加藤清の仕事】

加藤清の仕事としては、心理療法と宗教との関係を意義づけたところが最も大きいであろう。その核心にあったのは、統合失調症の患者の治療的関わりで感じ取ったものにある。統合失調症の患者が発症の時点で体験すること、症状の悪化のたびに体験することの中に、宗教体験の際に生ずる変性意識との共通性を発見して、そのことの意味を、精神医学の場で表現しようとしたことであろう。

加藤はこの作業を学問研究の分野で推進しようとはしなかった。そのため、詳細な学術論文や著書は残されていない。発想の変化の要所に触れた、メモ書きのような文章が残っているだけである。そのため、それら書かれた文章を読み込んで、加藤の作業の全体像を再現することは難しい。

加藤は、サイケデリック薬剤を使った治療者のイニシエーションという形で、その作業を行った。あくまでも、臨床的な出会い、関わりを通じてのものであった。イニシエーションを受けた対象は精神科医、心理療法家、その他の人々がいた。サイケデリック薬剤の使用によって、治療者の自己洞察を促進しただけでなく、その人にとってふさわしい宗教性、つまり個別の宗教・宗派を越えた、普遍的な宗教性への開眼を導いてもいた。宗教体験と精神病体験の共通基盤を差し出すことによって、患者は治療者と対等の立場に立つだけでは

なく、場合によれば、より深い体験を持っている者とされる。この位置の変化の中に、加藤は精神科臨床の極めて重要な足がかりがあるととらえた。

【残された問題】

1、サイケデリック作用をもつ薬物が禁止されてからは、別の技法を工夫するということはなかった。加藤の中には、治療者が何かを与えるというパターンが強かったであろう。

2、加藤の指向性には視覚優位の傾向があった。「見抜く」「見極める」「見据える」という姿勢が強く、一種の自己愛的な傾向につながるものである。加藤自身は自分の最終的な課題を地上的な自己愛を宇宙的な自己愛に発展させることとして語っていた。

3、加藤は霊的能力、透視力のようなものを語りながら、それを伝えるための本格的な修行を工夫した様子は見られない。色々な修行法の特徴やそこから得られるものを、手際よく並べることができたが、それぞれの手法を、相手の人間を見て推薦するということはなかった。

4、加藤の方法が最も生産的に動くのは、加藤をとりまくグループが加藤を刺激剤として、創造的活動を活発化されるときである。しかし、このグループはあくまでも加藤を中心とした太陽系のようなもので、加藤の刺激によって作り出された、多焦点的なネットワークではない。

【参考文献】

加藤 清，井上 亮，黒木 賢一ほか（1994）『癒しの森—心理療法と宗教』、創元社
加藤清（2002）「精神拡張性ドラッグによる治療体験」、武井 秀夫、中牧 弘允 編『サイケデリックスと文化・臨床とフィールドから』、春秋社
山中康裕，山田宗良 編、鼎談・加藤 清、神田橋條治、牧原 浩（1993）『分裂病者と生きる』、金剛出版

特別講演 第1部 13:00~14:10

○仏教における心の理解と瞑想

—近著『仏教と現代物理学—一休の【般若心経】を読む—』に依りながら—

講師 可藤豊文先生（哲学者）

お話しするテーマは心の二相（妄心と真心）、仮我と真我、娘生の面目と本来の面目、真諦と俗諦、自心所現の幻境（月華の比喻）、色心不二の法、返本還源（順造化と逆造化）、転依（転捨転得）、瞑想などですが、トランスパーソナル、あるいは自己実現とはどういうことかを、仏教の視点から述べてみたいと思っています。そのいくつかをパターンで示せば、心（の二相）で言えば、妄心から本心へ、自己で言えば、仮我から真我へ、認識論で言えば、俗諦から真諦へとなるでしょうが、これらは密接に結びついています。そして、これには辿るべき道があり、それが一般的に瞑想と言われているものです。心の二相については下記の如くですが、明らかにすべきは何か、あるいは、辿るべきは何処か、今述べたことからおおよそ推察できる筈です。

【心の二相】

『大乘起信論』は心を妄心（心生滅の相）と真心（心真如の相）の二相に分けます。その他二相に分ける例として、仏教は人心（human mind）と仏心（Buddha mind）、チベット仏教ニマ派は心（sems）と心性（sems-nyid）、道教は人心と道心、仙道は有心と無心、真言密教（空海）は妄念と本心、禅は心（mind）と無心（No-mind）、一休は小心と大心、親鸞は散乱の心と明々たる本心などがあります。言うまでもなく、現在、私たちが生きているのは妄心であり、妄心というと、何かに取り憑かれた妄想と考へ、私には関係ないと思う人がいるかもしれませんが、そうではありません。六祖慧能（638-713）が、「心は本よりこれ妄なり」と言ったように、私たちが深くその起源を尋ねることもなく、日常的に良くも悪くも心と呼んでいるものであり、心理学が扱っているのもこの心なのです。

一切の妄念はみな本心より生ず。本心は主、妄念は客なり。本心を菩提と名づけ、また仏心と名づく。

（空海『一切経開題』）

○講師紹介 可藤豊文（かとう とよふみ）先生

1944年、兵庫県に生まれる。京都教育大学理学科（物理化学）卒。大谷大学大学院文学研究科博士課程（真宗学）を経て、コペンハーゲン大学キルケゴール研究所およびカルガリー大学宗教学科でチベット密教などを学ぶ。宗教学専攻。主要論著として『神秘主義の人間学—我が魂のすさびに—』、『瞑想の心理学—大乘起信論の理論と実践—』（韓国語版有り）、『自己認識への道—禅とキリスト教—』、『親鸞聖人五ヶ条要文』、『真理の灯籠—ブツダの言葉☆30講—』、『宗教教育の現場から☆女子大生—自己のアイデンティティーを求めて—』、『悟りへの道—私家版*教行信証—』、『仏教と現代物理学—一休の【般若心経】を読む—』、『Den Kategorie i Menneske Tilvæelse—Kierkegaard og Shinran—』など。

特別講演 第2部 14:20～15:30

○坐禅の解明：人を成熟させる触媒として

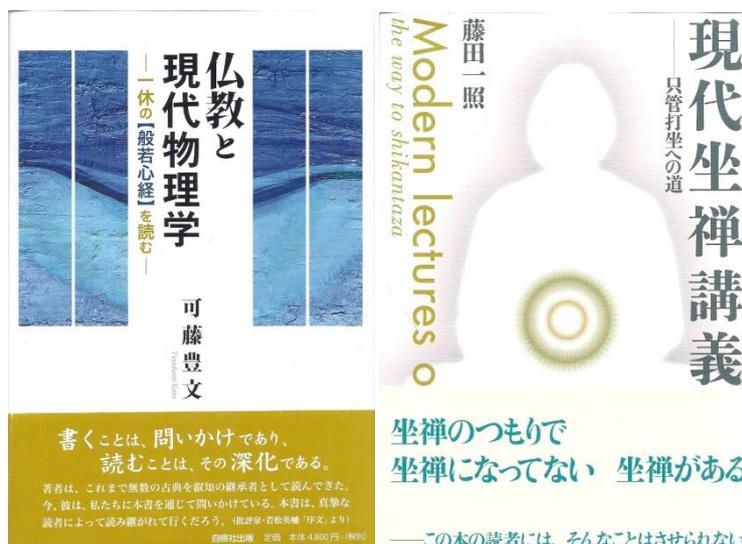
講師 藤田一照先生（曹洞宗国際センター所長）

道元は「禅僧の能くなる第一の用心は、只管打坐すべきなり。利鈍賢愚を論せず、坐禅すれば自然によくなるなり」と語った。しかし、その道元は一方で坐禅の「無所得無所悟」性を強調している。なにものも期待せずに、目的を持たないで打坐に徹せよということだ。そのような態度で坐る坐禅が人を自然によくなるのは、坐禅のなかでどのようなことが起きているからなのだろうか。悟り体験を目指すものとしてではなく人間の成熟を触媒的に促進する営みとしての坐禅について私見を述べてみたい。

○講師紹介 藤田一照（ふじた いっしょう）先生

1954年 愛媛県生まれ。東京大学大学院教育学研究科教育心理学専攻博士課程を中途退学し、紫竹林安泰寺にて曹洞宗僧侶となる。1987年よりアメリカ合衆国マサチューセッツ州西部にあるパイオニア・ヴァレー禅堂に住持として渡米、近隣の大学や仏教瞑想センターでも禅の講義や坐禅指導を行う。2005年に帰国。葉山にて独自の実験的坐禅会を主宰。2010年よりサンフランシスコにある曹洞宗国際センターの所長として日本と海外を往還している。著書に『現代坐禅講義』（佼成出版社）、共著に『アップデートする仏教』（幻冬舎新書）、『あたらしいわたし』（佼成出版社）、訳書にティク・ナット・ハン『禅への鍵』、『法華経の省察』、ドン・キューピット『未来の宗教』（以上、春秋社）、スティーブン・バチラー『ダルマの実践』、デイビッド・ブレイジャー『フィーリング・ブッダ』（以上、四季社）、キャロライン・ブレイジャー『自己牢獄を超えて』（コスモス・ライブラリー）がある。

〈両先生の関連文献〉



分科会① 15:45～16:30 (2号館2階)

○禅と心理療法を巡る懇談会 担当：塚崎直樹先生 (2201 教室)

昨年に引き続き、禅と心理療法に関する分科会を開催したいと思います。昨年は、このテーマに関心を持つ人たちの交流の場という性質が強く出ました。今年もそのような性質のものになるかと思っています。参加者の意見としては、トランスパーソナル心理学に関心をもって実際の臨床にあたっていると、そこでの経験を交流させる場が少ないということです。分科会と言っても、参加者の自己紹介と関心のあるテーマの紹介ということになりますが、お互いが理解し合うことで、実りある交流の場が作られることを願って、今回も集まりたいと思います。

〒603-8179 京都市北区紫竹上梅の木町 17-5 つかさき医院

TEL (075)495-2346 FAX (075)495-2356

E-mail bankyu@mbox.kyoto-inet.or.jp

<http://web.kyoto-inet.or.jp/people/bankyu/>

○死とともに生きる 担当：永澤哲先生 (2202 教室)

このプロジェクトは、仏教瞑想、臨床医学、ヨーガ、気功法、心理、脳科学、生命倫理などからのアプローチを統合し、日本の風土、伝統に根ざした「新たなスピリチュアル・ケア」を創造することを目指しています。その第一歩として、2015年4月24日～26日に、アメリカ合衆国のウパヤ禅センターのジョン・ハリファックス老師、トニー・バック教授（緩和ケア、ワシントン大学医学部）、シンダ・ラシュトン教授（生命倫理、ジョン・ホプキンス大学看護学部）を招いて、ターミナルケアに従事する対人援助職（医師、看護師、社会福祉士、介護士、心理療法士、宗教関係者など）や看取りに関わる家族・ボランティアを対象に、バーンアウト（燃え尽き）を防止するためのプログラム（"GRACE"）を行います。瞑想、ヨーガ、事例研究、シェアリングなどをおして、ターミナルケアにつきまとう「燃え尽き」を防止し、より良きケアを提供するためのあり方を学ぶことを目的にしています。詳細は <http://bwdj.org>

○紛争解決とスピリチュアリティ 担当：松本孚先生 (2204 教室)

日本語にすると「紛争」、「対立」、「争いごと」、「諍い」、「不和」、「葛藤」、などと訳される「コンフリクト (Conflict)」について、前回大会に引き続きその解決や転換を非暴力的に且つスピリチュアル（トランスパーソナル）に実践する方法を追究していきたいと思っています。コンフリクトの対象は、対人 間コンフリクトから国家間コンフリクトまでより広い範囲で検討していきたいと思っています。

分科会② 16:35～17:20 (2号館2階)

○霊性に導かれる援助法の探求 担当：石川勇一先生 (2201 教室)

カール・ロジャースは「クライアント・センタード・セラピー」を提唱し、専門家主導の対人援助のあり方に大きな一石を投じました。

それから 60 年余り経った現在、クライアント主導の理念に加えて、クライアントの「どの意識領域を中心とするか」を明確にする必要があるような気がしています。私は、クライアントの自我や無意識ではなく、より精妙で微細な意識である魂や霊を中心にとすると援助がより効果的に動くという心理臨床経験や、さまざまな瞑想体験、修行体験から、これを「スピリット・センタード・セラピー」と名づけ、対人援助の根本原理を提案させていただきました(拙著『スピリット・センタード・セラピー』せせらぎ出版、2014年)。皆様は対人援助における霊性の役割や、重要性についてどのように感じ、考えていらっしゃるでしょうか。分科会では、参加者の皆様と共に、この主題を巡って、体験のシェアや、意見交換ができればと思っています。

○可能性としての「マインドフルネス」 担当：小室弘毅先生 (2202 教室)

昨年のマインドフルネス学会の発足をはじめ、「マインドフルネス」という概念が医療や心理の領域で注目されてきています。しかしそれは、「マインドフルネス」の技法的側面やエビデンスに基づいた効果のみに注目し、「マインドフルネス」のスピリチュアルな側面や、生活の中における「マインドフルネス」など、「マインドフルネス」が持っている多様な可能性を見落としているように思われます。「マインドフルネス」が今後一般社会に広まっていく過程で、この傾向はますます強まっていくことが予想されます。

本分科会では、仏教、心理療法、ヨーガ等さまざまな観点から、技法や効果に限定されることのない、「マインドフルネス」が持つ本来の豊かさと可能性とについて考えていきたいと思えます。

○スピリチュアル・エマージェンシー・クンダリニー体験 担当：巻口勇一郎先生 (2204 教室)

臨死体験やスピリチュアルイマージェンシスに関して研究動向を把握しておきたいと考えています。チャクラ、スシュムナーの感覚と臨死体験における、

トンネル体験や体外離脱体験について、どこまでかたりえるのか、臨床記録に関しては医師や医療関係者でお話を伺えるような方のご参加をお待ちしています。

時折、私のもとに非日常体験をした方からの相談が来るため、そうした方へはこの学会分科会への参加をすすめている。

【分科会について】昨年度から始まったもので、ワークショップとは違い、会員による活動の紹介や交流を中心するものです。どの分科会に参加するかを事前に申し込む必要はありません。説明文を読んで、関心のある分科会に自由にご参加ください。

文理学部キャンパスマップ



メイン会場（受付）	図書館 3階 オーバルホール
分科会①&②	2号館 2階 (2201, 2202, 2204 教室)
懇親会	第2体育館 1階 カフェテリアチェリー (予定)
理事会（大会前日）	2号館 12階 哲学科会議室

日本トランスパーソナル心理学／精神医学会 第15回学術大会 プログラム

2015年（平成27年）2月10日発行

発行 日本トランスパーソナル心理学／精神医学会

〒156-8550 東京都世田谷区桜上水 3-25-40

日本大学文理学部哲学科内 合田秀行研究室

編集責任 合田秀行

デザイン 初見弘一

印刷 文成印刷